

博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 11 集

2018（平成30）年度

東 京 神 学 大 学

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号、平成 25 年 4 月 1 日改正施行）第 8 条による電子公表と併せ、2018 年度に本学に於いて博士の学位を授与した者の論文の内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録し、印刷公表に供するものである。

氏 名： 安井 聖（東京都）

学位の種類： 博士（神学）

学位記番号： 甲第3号

学位授与の要件： 学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第1項

学位授与の日付： 2019年3月8日

学位論文題目： 「アタナシオス神学における神論と救済論の関係についての考察」

審査委員会： 主査 東京神学大学教授 関川 泰寛

副査 東京神学大学名誉教授 棚村 重行

副査 関西学院大学教授 土井 健司

内容の要旨

1.序論

本研究第一部ではアタナシオスの神論、特に神の善性の理解の特質を論じた。まずアタナシオスとの比較検討を念頭に置きながら中期プラトン主義とオリゲネスにおける神の善性の理解を論じ、次にアタナシオスの『異教徒駁論』、『ロゴスの受肉』、『アレイオス派駁論』第3巻第59～67章における神の善性の理解を考察した。第二部ではアタナシオスの救済論を取り上げ、『異教徒駁論』、『ロゴスの受肉』、『アレイオス派駁論』、『アントニオスの生涯』において展開されている救済論を考察した。以上の議論を踏まえて結論では、アタナシオス神学における神論と救済論との関係性がどのような特質を持つかを論じた。

2.アタナシオスの神論の特質——神の善性の理解を巡って

2.1.中期プラトン主義とオリゲネスにおける神の善性の理解

中期プラトン主義者たちにとって、プラトンの言う至高者なる神＝善のアイデアと、デーミウルゴスとの関係をどのように理解するかが課題であった。アルキノオスとヌメニオスは神の善性の概念を用いて、一方では善のアイデアである第一の神がこの世界の善の源泉でありながら、他方で善のアイデアはこの世界と直接的な関わりを持つことは決してなく、あくまでも媒介者である第二の神を通して関わる、との理解を言い表した。オリゲネスの神学にはこの中期プラトン主義の影響を認めることができ、その思想体系は至高の神と被造物との間に媒介者を位置づける構造となっている。しかし中期プラトン主義者には思いも及ばないほどに、オリゲネスは神が被造物と深く関わってくださるお方であると理解し、オリゲネスは神の善性の概念を用いて、御父が御子と一体となって被造物に対して直接的に働きかけられる姿（神の経綸）を言い表した。さらにオリゲネスは、神の経綸がどのような罪と悪の現実の中にある被造物にも及んでいると理解し、この世界の罪や悪の現実さえも神の摂理的、教育的な義の表現に他ならないと主張して、両者を調和するものと理解した。けれどもオリゲネスの主張した被造物の永遠性や万物の復興という教理には、人間の救済の課題によって神の存在と行為が規定されてしまい、被造物に対する神の自由と主体性が確保できなくなってしまう危険が内包されているのである。

2.2.『異教徒駁論』における神の善性に基づく自己啓示

まず『異教徒駁論』第2～29章において、神の自己啓示を受け入れない者の無知と偽りが論駁される。すなわち神がその善性に基づいて人間を創造なさったからこそ人間は神を観想し得るのに、魂は神を観想する本来のあり方を見失い、目に見えるものに神を求めて偶像を作り出してしまふことをアタナシオスは批判する。こうして第30章から、神の自己啓示の光がどれ

ほど自明なものとして輝いているかを論じていく。そこでアタナシオスはまず第30～34章で、神の自己啓示そのものではなくて、まず人間の魂が神の啓示を受け取ることができる存在として神に創造されており、本来目に見えない神を観想することができるのだとする。そしてそれにもかかわらずご自分を観想しそこねている人間を神は放置なさらしないで、被造物を通して働くロゴスによって(第35～44章)、さらには聖書を通して働くロゴスによって(第45～46章)、ご自分を啓示しておられるのである。

2.3.アタナシオスの『ロゴスの受肉』における神の善性

『ロゴスの受肉』はその冒頭で、ロゴスの受肉の出来事にこそ神の善性が顕されている、と述べており(第1章)、さらにロゴスが受肉なされたことによって顕された善なる神の姿を、二つの側面から論じていく。第一に、神は善であられるからこそ、ロゴスの受肉の出来事によって、人間を死への腐敗から解放してくださった(第2～10章)。すなわち、神は人間がご自分を観想して生きることができるように創造されたのに、人間は神の法に背き、神を観想することを捨てたために、神の裁きを受けて死への腐敗に向かう責任を負うことになってしまった。人間が法に則して神の裁きを受けないとすれば神の真実性が損なわれるし、人間が神の裁きによって死への腐敗に投げ出されてしまうならばそれは神の善性に相応しくない。そこで神の真実性と神の善性の両者を満たすためにロゴスが受肉されたのであり、このお方の十字架の死の内にすべての人が死ぬことによって人々を腐敗に定める法が破棄され、ロゴスの復活の恵みによって人間は不滅の生へと引き戻されたのである。第二に、善なる神はロゴスの受肉の出来事によって、神を観想する生に人間を導いておられることを、アタナシオスは様々な角度から論じていくのである(第11～55章)。

2.4.アタナシオスの『アレイオス派駁論』第3巻第59～67章における神の善性

『アレイオス派駁論』第3巻第59～67章においてアタナシオスは、中期プラトン主義の存在論的概念に依拠しながら、神の意志と神の存在とを同一化することによって、神の意志の永遠性を論証している、とメイエリングは主張する。しかしこの箇所におけるアタナシオスの議論の目的は、神の意志に関する神学的難問に答えを出すことにはではなく、御子を被造物と見なすアレイオス派の理解を論駁して、御子の被造物に対する主権性を論証することにある。アタナシオスは、御父と御子の関係(神の父性)と、神と被造物の関係(神の経綸)とを明確に区別し、神との関わりにおける御子と被造物との違いを強調したかったので、この箇所で神の意志と存在との同一化ではなく、神の意志と御子との同一化を主張している。神の「本性に基づいて」生み出された御子は、神と共に主権性を持ち、神の意志そのものとして被造物を創造した。そしてアタナシオスは神の善性の概念を神の父性と結びつけ、神の父性が神の「本性に基

づいて」いると主張するための例証として、神の善性の概念を用いる。そうすることによって、「神の意志に基づいて」いる神と被造物の関係と、御父と御子の関係との相違を際立たせているのである。そして御父と御子の永遠に生成的な愛が神の被造物に対する愛のわざを生み出し、神の父性が神の経綸を力強く支えていることにこそ、神の善性が顕されているのである。

3. アタナシオスの救済論の特質

3.1. 『異教徒駁論』第30～34章におけるアタナシオスの人間論が意味するもの

アタナシオスは『異教徒駁論』第30～34章において、理性を持ち（第30～32章）、不死である（第33章）魂が人間に対して与えられているのは人間が神に向かうためであり、同様に人間が魂を自己浄化するのも（第34章）鏡のようにロゴスと御父を映し出すために他ならず、魂が神に向かうように創造されていることを言い表そうとしている。アタナシオスがこのように人間の魂が神に向かい、神を観想することができるように創造されていることを強調するのは、神を観想し得る魂を認めない人々を批判しつつ、神がこのような魂を人間に造り与えてくださることによってどれほど確かにご自分を啓示しておられるかを言い表そうとしているからである。したがって第30～34章における人間論は、創造の賜物を自ら捨てている人間の罪の重大さ、深刻さを強調することによって、ロゴスの受肉による救済が不可欠であることを明確にする、という役割を果たしているのである。

3.2. なぜ人間は悔い改めによってでは救われないのか

アタナシオスは『ロゴスの受肉』第7章において、人間が悔い改めによってでは救われない理由として、第一に、人間が悔い改めによって救われるならば神の真実性が損なわれてしまい、第二に、墮落によって剥奪された神の像にかたどられた恵みを回復させるのに悔い改めでは不十分である、とする。第一の理由では、神における首尾一貫性が崩れてしまうことが問題とされている（メイエリング）のではなく、悔い改めによる人間の側の働きかけによって律法に背いた人間に対する神の裁きが真実に貫かれないなら、神の主権が侵されてしまうから問題なのである。また第二の理由においてアタナシオスは、深刻な滅びの現実が悔い改めでは解決できないほどに人間を捉えてしまっていると言っている。したがって第二の理由が述べている深刻な滅びの現実、すなわち死への腐敗に捉えられ、神の像にかたどられた恵みが剥奪されてしまった人間の姿は、第一の理由が述べている神の主権に基づく裁きが真実に貫徹された結果、悔い改めでは解決できないほどに深刻なものとなっているのである。これは、『異教徒駁論』では人間の自己救済能力が認められていたが、『ロゴスの受肉』では滅びが決定論的に人間を捉えてしまっている（ラウス）ということではない。過去の墮罪の出来事が現在の人間を決定論的に滅びに定めているのではなく、まさに今この時存在そのものである神を観想しようとしな

めに、人間は無が本性である自らの姿に心奪われ、死への絶望に支配されて生きている。そのような人間の姿に、アタナシオスは人間の滅びの現実を見ているのである。しかし同時にアタナシオスは、自らの罪によって死への絶望に押し込まれてしまっている人間をも、神が主権者として支配しておられることに読者の目を向けさせようとしている。主権者なる神を仰ぐことができるならば、その人はロゴスの十字架と復活による救いのみわがが自分にも成し遂げられているのだと確信し、死への絶望から解放され、復活に希望を置いて生きるようになる。

3.3. 『アレイオス派駁論』におけるアタナシオスの救済論

アタナシオスは本書で、アレイオス派の聖書解釈を批判しながらその箇所に関する自らの理解を提示することによって、キリストの神性を論証し、さらにこのお方の受肉を通して遂行された救済のみわがの意義を説き明かしている。本研究では特にフィリピの信徒への手紙第2章5～11節、詩編第44篇7～8節、箴言第8章22～25節を講解している箇所と、聖書の解釈原理である「聖書の意図」を講解している箇所を取り上げて、そこに言い表されているアタナシオスの救済論の特質を考察した。すなわちキリストによる人間の救済は神の神らしさを顕すのである（フィリピ2：5～11の講解から）、人間の救済という目的によってキリスト論が決定づけられているのではなく（ハルナック）、その救いの内実と実現を神が主導しておられるのであり（詩編44：7～8の講解から）、御子による救済の出来事は御子の主権性によって支配され導かれており（箴言8：22～25の講解から）、ロゴスの受肉による神化のみわがは人間がただ神だけを畏れて礼拝する者とされるためのものである（「聖書の意図」の講解から）。したがって本書では、神論が絶えず主導的な役割を果たしながら、救済論が論じられている。

3.4. 『アントニオスの生涯』におけるアタナシオスの救済論

本書は悪魔との戦いに勝利する秘訣が、悪魔を恐れないこと、また悪魔への恐れに打ち勝たせる神の臨在のリアリティ、神とキリストが悪魔・悪霊に対して完全に勝利しておられるというリアリティを重んじて生きること、さらに神ただお独りをこそ恐れて生きることにある、と述べている。だから神の霊の働きと悪魔・悪霊の働きを正しく識別することが重要であり、霊を識別する力も神から与えられる恵みの賜物に他ならない。悪魔との戦いにおいて最も重要なことは、ただ独り恐れるべき神が人間の味方となっていてくださることである。したがって当然問われるべきは、神と自分がどのような関係かということであり、神との関係を損なう自らの罪をどのように克服するかということなのである。そしてアントニオスが悪魔との戦いにおいて十字架のしるしを行なう時に、キリストの十字架の死によって自分の罪責が取り除かれ、圧倒的な力で悪魔を打ち負かしておられる神が自分を受け入れ、味方となっていてくださることを心に刻んでいた。アントニオスが戦ったのは、自分の中に内在しており、それだけに自分

の力で克服すべき弱さなどではない。人間は闇の力に支配されているからこそ、いかなる意味においても自分の力で克服できない困難に直面している。本書では悪魔との戦いを描くことによってそのような人間の現実を表現し、しかもキリストこそがただ独りその悪魔との戦いに立ち向かって勝利することができることを力強く語っている。このような仕方でも描く人間の救済における神とキリストの主権性が、本書の救済論において際立っているのである。

4.結論

アタナシオスは『アレイオス派駁論』第3巻第59～67章においても、『異教徒駁論』、『言の受肉』と同様に神の経綸と結びつけて神の善性の概念を用いていたが、同時にこの両書には見られない新しい理解が述べられていた。すなわち神の経綸は、御父と御子の間の永遠に生成的な愛の交わりによって基礎付けられているのである。しかし『ロゴスの受肉』もまた人間の救済という神の経綸の問題から出発して、神の本性に属する受肉の問題を考えているのではなく、あくまでも神論が救済論を基礎付けていると理解しており、神の善性をこのような神論と救済論との関係を捉える概念として用いている。したがって『ロゴスの受肉』と『アレイオス派駁論』第3巻第59～67章は、神の善性を言い表す表現の仕方においては違いがあるが、その理解の内実においては一貫している。『アレイオス派駁論』全体において展開されているアタナシオスの聖書講解においても、神論が救済論を基礎づけるという構造が見られるのである。オリゲネスは、御子の永遠の生誕の理解を展開し、御父に対する御子の従属説の理解を乗り越えて、神論と救済論との区別をしようとしていたが、他方で存在の基本的な区分を非時間的不可視的世界と時間的可視的世界との間に置き、被造物は非時間的な先在の世界においてロゴスの中にその存在が与えられているとし、子なるロゴスが永遠の存在であるだけでなく被造物も永遠性を持つと考えた。その結果、御子の永遠の生誕と世界の創造とが事実上論理的につながってしまい、御父と御子の関係の永遠性だけでなく、神と被造物の関係の永遠性までも主張することになってしまった。このような二元論を前提とするからこそ、オリゲネスにとって神論が救済論に対して主体性を持つと言い貫くことが困難になった。これに対してアタナシオスは中期プラトン主義的な二元論を捨てて、神と被造物の明確な区別をその神学の土台に据えた。だからこそアタナシオスは救済論を力強く語るコンテキストにおいても、その救済論を神論に基礎付けられたものとして論じ、神の被造物に対する主権性を一貫して主張し得たのであり、そこに見られる神の姿を神の善性という言葉を用いて言い表したのであった。このようなアタナシオス神学の構造は『アントニオスの生涯』にも反映されていたのであり、人間が自分で自分を救うことのできない現実を悪魔を描くことで明確化し、しかもその悪魔に決定的な勝利を収めておられる神の主権性の中で人間に与えられている救いの確かさを言い表していたのである。

審査結果の要旨

博士論文審査要旨

関川泰寛

本審査要旨は、安井聖氏の東京神学大学大学院学位「博士（神学）」の請求論文の審査報告である。安井聖氏の学位請求論文は、「アタナシオス神学における神論と救済論の関係についての考察」という表題によって、2018年6月15日に提出された。本文は、A4版で268頁、文献表11頁を合わせて279頁である。研究科委員会は、論文提出と同時に、関川泰寛教授（指導教授、主査）、棚村重行東京神学大学名誉教授（副査1）、土井健司関西学院大学教授（副査2）の3名による審査委員会を構成した。審査委員会は、2018年10月29日（月）午後1時～2時40分まで、東京神学大学旧会議室において、安井聖氏の出席を求めて、論文についての審査を行った。審査の結果、本学位請求論文は、学術的な水準に十分達した、オリジナルなものであることを認め、審査委員会では合格点を与えたので、教授会メンバーの承認をお願いする。本論文は、教授会メンバーに回覧済である。

本論文の趣旨と特質

安井聖氏の学位請求論文は、4世紀のギリシア教父の一人アレキサンドリアのアタナシオスの神学の教理的主題に関わる研究である。アタナシオス研究は、教父学の分野では、教理史のみならず、古代教会史、古代ローマ史、古代修道制史、ビザンツ神学など広汎な研究領域と関わるが、本論文は、特にアタナシオスの神論の研究に集中し、そこから彼の救済論の特質を探ることを目的としている。その際、アタナシオスの神論における「神の善性」概念に焦点を絞ることによって、中期プラトン主義やオリゲネスの神観との相違と共通点を考慮しつつ、アタナシオスにおける神論と救済論の関係を明らかにしようとする。

ハルナック以来、アタナシオスにあっては、救済論が神論を根拠づけているという立論が多く研究者によってなされてきた。これに対して、安井は、D.リッチルやバイシュラーク、関川などの諸論文に触発されて、むしろアタナシオスの神論が救済論を基礎づけていることをアタナシオスのテキストから論証しようとする。その際に、Leemans や Blaising らがアタナシオス研究で採用した文学批評的方法を用いて、予めたてられた主題に論文主題を組織化、収束化する弊害を回避して、テキストの丹念な読解から、アタナシオス神学の全体像を明らかにしようとする。

細分化する現代の教父学では、一人の教父の神学の全体像を模索する試みは、どちらかと言えば敬遠され、古代ローマ史やビザンツ史とのかかわりから神学

と歴史世界の関係を探求する文献学的な研究、教父の著作のテキストの背後に広がる歴史世界とテキストの関係を探索する傾向が強い。例えば、アタナシオス神学の研究においても、安井が二次史料として掲げている、Schwartz, Schnemelcheer, Brakke, Barnes らの研究の傾向もそうである。

本論文は、このような教父学の傾向とは異なって、アタナシオスの主要な著書、論文を渉猟した筆者が、先行研究の成果を知悉しつつ、優れた洞察力を発揮して、アタナシオスの神論と救済論の内的な関係を明らかにした力作である。

本論文の構成と概要

本論文は、1 序論で、研究目的と研究史を概説した後、2「アタナシオスの新論の特質—神の善性理解を巡って」でアタナシオスの神論の特質を、神の善性（アガトス、アガトテース）概念に着目して論じ始める（2.1）。善性概念に着目することで、中期プラトン主義の善性概念とオリゲネスの善性概念を比較検討する視点からの叙述が可能となる。

中期プラトン主義者のアルキノオスやヌメニオスは、善のイデアである第一の神が、世界に内在する善の源泉でありながら、直接世界と関与することがないと考えた。第一の神の世界への関与は、第二の神という媒介を通して可能となると理解された。

これに対して、オリゲネスの神論は、中期プラトン主義の影響を受けて、至高の神と被造物との間の媒介者の存在を前提としながら、中期プラトン主義とは異なって、至高なる一者すなわち神が、被造物と深く関わるという思想にまで展開していく。その際、御父なる神は、御子イエス・キリストと一体となるほどに、被造物への関与を深め、人間の罪と悪の現実にも及ぶと理解した。オリゲネスは、キリストの十字架の死の出来事に、神であるキリストの善性をもっともよくあらわされていると考えたのである。ここには、不受苦であること（アパテイア）に神の特質を見出すプラトン主義者には考えられない思想の展開がみられる。

オリゲネスにあっては、この世界の罪や悪の現実もまた神の摂理的、教育的な義の表現であって、神の経綸の及ぶところと考えられた。しかし、オリゲネスは、被造物の永遠性や万物の復興の教理を合わせて主張したために、人間の救済の課題によって、神の存在と行為が規定されてしまい、被造物に対する神の自由と主体性が背後に退いてしまう傾向がみられた。

ここから、アタナシオス神学の神論と救済論の関係は、はたしてオリゲネスに淵源する思想的系譜を継承するのか、あるいはそれとは断絶した神学的な構造があるのかという問題に至りつく。

ハルナック以来、多くの研究者によって、救済論が神論を根拠づけるという構

造がアタナシオスの神論と救済論の関係の要であると考えられてきたが、安井はこの点を疑問視し、アタナシオス自身の著作に丹念にあたって、むしろ神論こそ、アタナシオスの救済論を根拠づける内的な神学的構造を形作っていることを論証しようとする。2以下では、アタナシオスの『異教徒駁論』『言葉の受肉』『アレイオス派駁論』『アントニオス伝』などのテキストが丹念に読まれ分析されていく。

2.2では、『異教徒駁論』*Contra Gentes*を分析するが、安井によれば、この書は、人間の魂が神の啓示を受け取ることができる存在として創造されていて、神の観想が可能であるにもかかわらず、偶像礼拝によって、それをし損ねている人間の罪の問題を扱っている。神はそのような人間を放置せずに、ロゴスの受肉によって自己を啓示するという真の主題につながる。つまり、『異教徒駁論』の中心主題は、神の啓示論であり、だからこそ、『ロゴスの受肉』*De Incarnatione*の冒頭部分、すなわち、ロゴスの受肉にこそ神の善性が現わされているという議論に続くのだと分析する(2.3)。特に『ロゴスの受肉』2～10章が、神は善であるゆえに、ロゴスの受肉によって人間を死に至る腐敗から解放し、人間をして、神を観想する生活に導くと議論を扱っている。ここから、さらに安井は、2.4で『アレイオス派駁論』*Contra Arianos* 3巻を分析する。Meiyeringなどの先行研究が、神の意志と神の存在とを同一化することで、神の意志の永遠性を論証するところに3巻の特質を見たのに対して、安井は、アタナシオスの議論の目的は、御子を被造物とみなすアレイオス派を論駁して、御子の主権性を論証するところにあると考える。

3は、「アタナシオスの救済論の特質」という表題の下、『異教徒駁論』『ロゴスの受肉』『アレイオス派駁論』『アントニオスの生涯』が再度分析される。3.1では、『異教徒駁論』30～34におけるアタナシオスの人間論が論じられる。アタナシオスによれば、人間の魂は理性を持ち不死である。それは、人間が一被造物として神に向かうためであった。同じように、人間が魂を自己浄化するのも、鏡のようにロゴスと御父を映し出すためであった。この点で、『エネアデス』1・6・5～6に出てくる鏡の比喻との差異が明瞭になってくる。プロティノスにとっては、人間の魂が自己浄化されること自体が大切であったが、アタナシオスにあっては、鏡そのものの美しさは重要ではなく、むしろ人間が魂の自己浄化のために自分自身に向かうことこそが罪であると理解された。

3.2では、『ロゴスの受肉』7章が取り上げられ、人間は悔い改めによっては救われない理由をアタナシオスがどのように展開しているかを分析される。アタナシオスは、その理由を二つ挙げる。第一は、人間が悔い改めによって救われるなら、神の真実性が損なわれてしまうからである。第二に、墮落によってはく奪された神の像にかたどられた恵みの回復には、人間の側の悔い改めでは不十分

だからである。アタナシオスにあっては、人間の滅びの深刻な現実、悔い改めでは解決できないと考えられている。この点で、Louth の先行研究が批判的に考察される。ラウスによれば、人間の救済能力について、先行する『異教徒駁論』では、悔い改めによる可能性が人間に内在すると考えられていたが、『言の受肉』に至って、アタナシオスはその可能性をより悲観的に考えるようになったと推論する。安井は、ラウスの推論に反対し、アタナシオスは『異教徒駁論』から『言の受肉』まで一貫して、罪によって滅びへと向かう人間の現実を見ているのであり、逆にその現実的な視点ゆえに、救済者である神の主権に人間が目を上げるように促すと考えている。人間が主権者なる神に向かい、救いへの希望を与えられる時に、救いという神の賜物にあずかるのである。つまり、アタナシオス神学は、救済への熱望やあこがれという動機に根拠づけられているのではなく、主権者たる至高の神を讃美頌栄する人間の姿勢の中で、約束される救いへと人を招くのである。

3.3では、『アレイオス派駁論』におけるアタナシオスの救済論が論じられる。この書物は、邦訳が存在しないために、安井は先行する現代語訳を参照しながら、安井自身の私訳を用いて論証を進めている。その際、フィリピ 2:5-11, 詩編 44:7~8、箴言 8:22~25 の講解と「聖書の意図 (スコポス)」論を展開している箇所に着目してアタナシオスの救済論を考察する。安井の分析によれば、キリストによる人間の救済は、神が神であることを示すものであり、救いの内実を神が主導しておられることの証しなのである。御子による救済もまた御子の主権性の発露であって、ロゴスの受肉による人間の神化は、人間がただ神のみを畏れて礼拝する者とされるものなのである。安井の結論は、『アレイオス派駁論』でも、神論が救済論を決定づけるというアタナシオス神学に一貫した姿勢を読み取ることができるというものである。

3.4では、『アントニオスの生涯』 *Vita Antonii* におけるアタナシオスの救済論が考察される。アタナシオスが描き出す砂漠の隠修士アントニオスの姿に、アタナシオス神学が投影されていると言われている。悪魔の誘惑と威嚇に恐れることなく立ち向かうアントニオスの姿は、神の臨在のリアリティとキリストの圧倒的な勝利の確信の中に生きるアタナシオスの神論と救済論が映し出されていると見ることができる。悪魔との闘いにおいて守るべき最も重要なことは、ただ独り恐るべき神が人間の味方になってくださり、神との正しい関係に入ることには他ならない。そのためには、神の霊を人間の霊と識別することが求められるとともに、神との関係を損なう罪をどう克服するかが問われる。アントニオスは、悪魔との戦いにおいて、十字架のしるしを切ることで、キリストの十字架の死によって自分の罪責が取り除かれ、悪魔を完膚なきまで打ち倒す神が罪を赦し、ご自分の支配に招き入れてくださるのである。つまり、『アントニオスの生涯』で

は、悪魔との戦いを描き出すことによって、人間の罪の現実が明るみに出され、臨在するキリストが人間に代わって悪魔との戦いに勝利してくださる主題の叙述が繰り返される。ここにも、神の主権性と主導性が、人間の救済に先立ってアタナシオス神学の要となっていることが示されている。

本論文の評価と問題点

本論文は、以上のような内容と構成を持つ、優れた教父神学研究と言える。関川泰寛『アタナシオス神学の研究』では、神学とともにアタナシオスが生きた歴史世界、周辺の思想世界との関わりを含めて論じるとともに、アタナシオスの神学の特質として、アタナシオス神学そのものの姿勢に頌榮的な性格を読みとるところに特色があった。安井の論文は、アタナシオスの神論と救済論に集中することによって、両者の関係を探索する神学的課題が、アタナシオス神学全体の中でどのように展開され保持されているかを、テキストの丹念な読解から論証した点に大きな貢献があると言わねばならない。その結果、アタナシオス神学の研究史の系譜から言えば、ハルナック以来の救済論に決定づけられた神論、キリスト論というアタナシオス神学の特質の理解を修正して、D.リッチルや関川の主張の正当性を論証することになった。

特に、ラウスやメイヤリングの諸論文のテーゼを批判的に検討した貢献も大きい。今後のアタナシオス研究に欠かすことができない新たな成果を提供することになるであろう。さらに、このようなアタナシオス神学の評価は、そもそもニカイアの正統神学の特質は何かという評価とともに、わたしたちの信仰と神学の基は何かというきわめて大きな視点を歴史神学的に吟味した研究となっている。本書では、わずかな言及しかされなかったが、T.F.Torranceの神学の基礎を形作るアタナシオス神学の評価ともかかわることであろう。

本論文は、アタナシオスの真正な著作である『異教徒駁論』『ロゴスの受肉』『アレイオス派駁論』『アントニオスの生涯』を主要な分析対象の一次史料として用いている。著者問題で議論のある『アレイオス派駁論』やオリジナルなテキストがギリシア語かシリア語かという議論の続く『アントニオスの生涯』などの各論には深入りはしないが、これらについても適切な評価と判断をもってテキストの読解を行っている。既訳のあるものは、それを利用しながら、安井氏は必要な場合には手を入れて用いている。『アレイオス派駁論』のみが、安井氏による本邦初訳となる。

このような本論文の評価を覚えつつ、なお論じ足りない部分、これからさらに論ずべき課題が残されている。

第一は、ハルナック以来の研究史、つまりアタナシオスの神論と救済論の関係

をもう少し紹介する必要があったのではないかという論評が、副査から投げかけられた。確かに、ハルナックの主張は、彼の『キリスト教の本質』などから容易に演繹されるものではあるが、アタナシオスの救済論の評価についてのハルナック自身の言葉を『教理史教本』などから紹介して、それを論評する手間を省かない方がよかったと言える。

第二は、方法論に関して、通時的側面と共時的側面の関係が不十分であるという指摘である。特に「善概念」を問題とする場合には、すでに新プラトン主義とオリゲネス、さらにはアタナシオスの間には、善概念に通時的には差異が生じているのであり、それをいわば共時的に比較検討することで生じる、ある種のずれを自覚して説明すべきではないかという問いである。つまり、新プラトン主義の「善性」概念とオリゲネスの「善性」概念は、同じギリシア語が使用されていても、概念体系そのものが相違するなら、単純な比較検討の対象とはならないのではないかという批判が出された。言い換えれば、「善性」概念の通時的な比較検討の前に、「善性」という概念に込められた内容の吟味検討があってもよかったのではないかという指摘である。

第三として、神論と救済論の関係を論じる場合に、論ずべきでありながら、なお論じきれていない部分があるとの指摘である。それらは、『アレイオス派駁論』を分析しながら、論駁相手のアレイオス派の特質の叙述、アタナシオス神学が生成していく4世紀のアレキサンドリアとローマ帝国のコンテクストとの連関、さらには、人間の魂の問題を詳細に論じながら、キリストの人間の魂の問題には触れられていない点などである。

第四に、アタナシオスの著作の利用にあたり、既訳のあるものはそれらを用いて、必要に応じて訳に変更を加えているが、その都度訳者の名前とともに訳の変更部分の明記が必要だったのではないかという指摘がなされた。また訳の改善が必要な箇所があり、その指摘もなされた。また章や節の区分が細かすぎ、きわめて短い節があるので、整理した方が読みやすいのではないかという指摘もあった。

これらは、本論文の欠点とまでは言えないが、今後の安井氏のアタナシオス研究のさらなる展開の中で適切に扱われ、指摘に答えることが求められた。

審査委員会は上記4点について質疑応答を行い、安井氏自身もまた、今後の研究の課題として受け止めることができた。

審査当日の安井聖氏とのディスカッション、質疑の内容を踏まえて、審査委員会は、合議の末、本論文を東京神学大学博士（神学）論文として合格判定をくだした。

2018年11月13日